

ロバート・フロストの詩に見る 人間と風景の関係について

寺尾 勝行

はじめに

本稿の目的は、人間と風景の関係について、まずはロバート・フロストというアメリカ詩人の具体的な作品に即しつつ考察してみようという点にある。

アメリカ人にとって、さらには欧米文化圏の人々にとって、人間と風景の関係はいかなるものか、また特に日本人のそれと比べて何か違いがあるのかどうかについて将来的に考察を進めたいという目標はあるのだが、一方で、例えば東洋－西洋という枠組みから議論を始めることは余りに大味過ぎて説得力に欠けてくるきらいがある。風景観は時代によっても変化するし、より細分化された地域ごとでも変化する可能性が高いからである。

筆者の考えでは、文化の問題、殊に文学に関わる議論は個別の具体的な事例（作品）の丁寧な読みから取りかかりたいと思うのである。そして願わくは、その過程で個々の作品の面白さが立ち現れてくるようなら最も望ましいのではないかと思う。

なお、人間と風景の関係という問題を以下では人間と環境（あるいは自然）との関係の問題とはほぼ同等のものとして扱っている。人間と風景の関係という問題は、人間が環境（あるいは自然）に対してどのような視線を向け、環境（あるいは自然）をどのように記述するか、またそのことにより環境から人間はどんな反応を得ることになるか、という問いかけに置き換えて考えることができると考えるからである。

また、人間と環境の関係と人間と自然の関係は全く同じという訳ではない。環境という概念には自然だけではなく、人工物も含まれるからである。しかし、フロストという詩人について考える時、人間と自然という対立軸を設けることが最も分かりやすくもあり、また有意義な結論を得る可能性の高い方法であろうと予想されることから、以下の論では環境と自然をほぼ等価として扱うことが多くなると思われる。予め諒とされたい。

1

フロストによる、人間と自然の関係を扱った詩としてしばしば取り上げられ、かつ比較的易しめと考えられるものから検討を始めたい。

詩“The Need of Being Versed in Country Things”（「田舎の事物に精通していることの必要」）は語彙、文法的に見て難しいところがなく、描写も一貫して具体的で、なされている議論にも複雑な点はなさそうに見える。その議論とは、簡単に言えば、人間と自然の間には大きな断絶があるが、それにもかかわらず人間は自然の様々なものに自分の感情を投影してしまう、というものである。

但し、一見単純そうに見える人間と自然の描写にも、実際にはかなり繊細な配慮がなされている。即ち、人間と自然の間の溝、この二者の対立をテーマにするのであれば、二者を截然と区別して描いた方が分かりやすそうに思えるのだが、実際はそうではない。

例えば第1連について：

The house had gone to bring again
 To the midnight sky a sunset glow.
 Now the chimney was all of the house that stood,
 Like a pistil after the petals go. (II.1-4)¹⁾

農場の母屋が火事のために焼け落ちた、というのであるが、炎が立ちのぼったと言わず、真夜中の空に日没の明かり（要するに夕焼け）を再度もたらした、と書く。また、焼け残ったものといえば、煙突（但し、日本人の受ける一般的なイメージとは異なり、ここでは暖炉から屋根の上に出た部分までの全体を指す。）²⁾ だけであるが、その様子を花弁が落ちてしまった雌しべのようだと形容する。これらのいずれもが人工物を描くのに自然のものをを用いている。

2連、3連では、この火事から焼け残った納屋とその納屋が大いに賑わっていた頃が回想される形で描かれる。（但し注意が必要なのは、回想であることをあからさまに示す語句は注意深く避けられていることである。）例えば第2連、1.7. では“Had it been the will of the wind”「それが（＝納屋への延焼が）風の意志であったなら」とあるように、自然に意志があるかのような描写がなされる。しかしそれにすぐ続けて“(The barn . . .) was left/ To bear forsaken the place’s name” (II.7-8.) 「(納屋だけが) ……残され/見捨てられたままこの農場の名を残していた」と純粹に人間の世界（人事）にのみ関わる事が記される。

3連では、これも単語で明示されてはいないが、おそらくは馬が干し草を運んできて、納屋の床板を勢よく踏み鳴らす往事の様子が描かれる(II.10-11.)。馬はもちろん自然の一部であるが、馬を荷馬車につなぎ、“team”(I.10.)として働かせるのは人間だけがすることである。またさらに続けてI.12.では、去年までの干し草、この夏刈り取ったばかりの草といった人間に関わる描写が入る。これをわざわざ人間に関わる描写というのは、干し草を蓄え次の夏の刈り取りまでの期間に備えること(=未来のことを計画的に考えて行動すること)は基本的に人間しか行わないからである。I.12.については、表現の手際のよさにも注目しておきたいところである。

No more it opened with all one end
 For teams that came by the stony road 10
 To drum on the floor with scurrying hoofs
 And brush the mow with the summer load. (241-242)

馬が運んできたのはこの夏刈り取ったばかりの草、“the mow”はおそらく納屋の中に残っている去年までの干し草を指すとみてよいだろう。今夏の荷“the summer load”が干し草を「こする」(“brush”)と必要最小限の語句により、今夏刈り取った草が荷台の両端からはみ出すほど一杯に積み上げられていることがはっきりとイメージできる。——そしてそのことにより、往事を思い起こす人さえない(cf. I.8. “forsaken”)現在と鮮やかな対照をなし、哀惜の情がかき立てられることになる。

自然の事物は擬人化されて描かれ、人間に関わることは自然になぞらえられる。両者は意図的に混合する形で表現されるか、擬人化された自然の描写のすぐ後に、人間の視点からの捉え直しが行われる。このうち前者は、いわゆる *pathetic fallacy* (感傷的誤謬) と呼ばれる表現技法で、ロマン主義後の詩人であるフロストが様々な作品の中で用いた表現技法であるとともに、この詩においてはタイトルおよび最終2行であからさまに指摘されている——しかも揶揄のニュアンスを伴う形で指摘されている——自然の見方でもある。

では、人事が自然の比喩を用いて語られることの意味は何なのだろう。筆者はここに、自然と向き合う時の人間のありようについてのフロストの考えがさりげなく、しかし確固として込められているのではないかと考える。即ちそれは、*pathetic fallacy* に傾きがちな人間の性質を指摘することで、先ずは客観的な立場から自然と向き合う立場があり得ることを主張しているように見えながら、実は人間の認識はどこまで行っても人間の立場から反省されたものであることを免れないことを示唆している

考えるのである。というのも、比喩という表現行為は人間のみしか行わない行為なのだから。

さらにここでは、哀惜の情や喪失感がどこから出てくるかを問うてみるとよい。一見して否定的に捉えられているかに見えるこれらの感情は、人間だけが持つ時間の意識から生まれて来るものである。人間は過去を振り返り、未来のことを気にかける。人間には記憶があり、それによって過去と現在とを比較してしまい、そこから感情が生まれる。さらにはそれらからストーリー（物語）が生まれ、歴史の意識が生まれる。それは人間に喪失感（また郷愁）といった悲しみをもたらす要因であると先ずはこの詩におけるフロストは言っているように見える。しかし、盛時の記憶はそのような幸福が少なくとも過去においてあり、また未来における可能性として存在することを示すという意味で人間の支えともなり得るものだ。ならば、人間における時間の意識とは、悲惨であると同時に栄光でもある³⁾。フロストはこの詩において、自然に過度の感情を読み込む人間の性^{さが}を揶揄するように描きながらも、その底でそういった人間的な想像力の働き方に積極的な意義を認めているように思われる。

2

前節において、フロストの詩では人間と自然の間に大きな断絶があること、にも関わらず人間は自然に働きかけずにはおれないと捉えられていることを確認した。しかしそれは何故なのであろうか。人間が自然に働きかけることにどのような目的（効能）があるのか。本節ではその点について考察を進めたい。取り上げる詩は“On a Tree Fallen across the Road”である。

先ずは原文：

On a Tree Fallen Across the Road

(To hear us talk)

The tree the tempest with a crash of wood
 Throws down in front of us is not to bar
 Our passage to our journey's end for good,
 But just to ask us who we think we are

Insisting always on our own way so.
 She likes to halt us in our runner tracks,

5

And make us get down in a foot of snow
Debating what to do without an ax.

And yet she knows obstruction is in vain:
We will not be put off the final goal 10
We have it hidden in us to attain,
Not though we have to seize earth by the pole
And, tired of aimless circling in one place,
Steer straight off after something into space. 14 (238)

次いで試訳：

道をさえぎるように倒された木について
(私たちが話すのを耳にせんとて)

木の裂ける音とともに嵐が
私たちの前に投げ倒す木は
私たちの旅の目的地への通り道を永久に
遮ろうとしてではなく、ただ私たちに自分が何ものであると考えているのかを尋
ねるため

私たちがいつもいつも自分自身のやり方（道）にこだわるので。
木は私たちにやらせたいと思っている、樞道をその場所で立ち止まり、
樞から降りて1フィートの雪に立ち、
斧なしでどうしたらよいか私たち同士議論をすることを。

それでいて木は邪魔立てが結局無駄なことを知っている：
私たちは最終的なゴールから逸^そらされることはない、
私たちは自身の中に成し遂げる力を隠し持っている、
但し、そのためには柱によって地面にしがみつくな^らば必要がある、
さもなくば、ひとつ場所を目的もなく回ること^に飽いて
何かを求め、まっすぐ舵を切り宇宙空間へ飛び出すやも知れぬ。

出だしは非常に具体的である。ニューイングランドの都市部を離れた場所ならば、

この詩の初出時（1921年⁴⁾の時代であれば十分起こり得たであろうような日常的なエピソードが、今日の前で進行しているといわんばかりに、現在形という形をとって語られる。（が、実際にはもちろん過去の出来事が振り返って描かれているのである。それともひょっとしたら詩人が実際に経験した出来事などではなく、空想もしくは仮想された出来事だと考えるべきなのかも知れない。）

話者を含む複数の人間（“we”）が雪橇に乗って移動している。ところが道の途中で道路をふさぐ形で木が倒れている。どうやら嵐により折れてしまったものらしい。この木を取り除かなければ彼らは先に進むことはできない。しかし簡単に動かせる大きさではないらしく、話者達は橇を降りて、1フィートの深さに積もった雪道に立ち、対応策を議論せざるを得ない。

ここまでの状況が1.1. から1.8. までにかけて、倒れた木の視点から提示される。タイトルにこそ“Fallen”とあり、1.1. の内容と合わせて「嵐によって倒された」木と受動態扱いになっているものの、1.9. まで文の主語に立つのは「木」であり（11.1～9. までセンテンスは3つあり、主語は“The tree”, “She”, “she”と全て木となっている）、この木がある意図をもって人間たちを観察する様子が描き出されるという形がとられている。“She”という代名詞からも明らかなように、そこでは木は擬人化されており、何を考えて道を遮るように倒れたのかといった動機や感情の「読み込み」が行われる。——木は人間たち同士が議論し合うのを聞くため倒れたと言うのである。（副題、また、11.6-8. を参照のこと）しかし、ではこの詩のテーマは自然の描写なのかと言えばそうではない。

1.10. から主語は“we”に切り替わり、主となるイメージも9行までとは大きく異なって非日常的な性格を帯びてくる。そのような性格を帯びてくる原因は、そのイメージが宇宙的な広がりを持っているからである。我々人間は一度目的を心の内に思い定めたら、「そこから逸らされてしまうことはない」（1.10.）、「人間の中には目的を達成せずには止まない、隠された力があるのだ」（1.11.）と述べた後、話者は、ただそのためには大地にしがみ続けることができなければならないと条件を加える。その際に使われる比喩が、大地に立てた（あるいは立っている）頑丈な柱“the pole”にしがみつinaがら、動き回る人間というイメージである。

これが宇宙的な広がりを持っていると言うのは、“the pole”には「柱」の意味とともにおそらく、“north pole”, “south pole”と言う時の「極」の意味も掛けてあると思われるからである。丁度極地点に柱を立て（地軸という棒が両極点を貫いて立っているさまを想像してみるとよい）それを握りしめたまま動き回るとしたら、人は極点の回りに円を描くことになるだろう。しかし次第に速度を上げていくとどうなるか。一定速度を超えると地球の重力という軌を離れて宇宙空間に飛び出してしまうことにな

る⁵⁾。そのように、人間は徒勞のような行為（地上での生）に飽いた時、握りしめていた「棒」から手を離し、「何ものか」（それは永遠の生かも知れない、絶対的な美なのかもしれない）を求めて宇宙空間に一直線に飛び出して行きかねない、そういう存在である、というのである。そのように読んでくると、“earth”という語もまた様々な含みを持った言い回しであることが分かるだろう。それは、棒を突き立てる地面という意味であると同時に、宇宙空間に対する地球という意味、さらには天（国）（heaven）に対する地上という意味をもひびかせてあると思われる。

とはいえフロストがII.10-14.で宇宙空間への飛翔（否定的な言い方をするなら、それは逃避である）を全面的に支持、推奨しているというのではない。それは、ロマン主義的価値観に対して距離を置く姿勢がこの詩の全体に行き渡っていることから証明できるだろう。丁度、道に倒れた木に人間的な意図や思考を読み込もうとする態度が *pathetic fallacy* であるように、地上での単調な労役（回転運動）に飽きて「何ものか」を求めて宇宙空間へ飛び出すという描写もまた典型的にロマン主義的姿勢なのであった⁶⁾。

筆者の考えでは、詩全体としては、人間の本質として相矛盾する部分を含む2つの性質が指摘されているのだと考える。即ち、一つは人間の意志（あるいは想像力）の強さ、人間が環境に対して自分の意図を結局は押しつけてしまうその執拗さ（*tenacity*）。その力の前では環境（自然）の反発や抑制も結局の所意味がない（“*in vain*”）のではないか、という指摘である。もう一つは、その執拗さの一方で人間には同じ事を繰り返す、あるいは同じことに固執することに飽きが来て、新しい目標に切り替えたいと考える性質があるという指摘。従って、最初に思い定めた目標にたどり着くためには言ってみれば1本の棒のような確固たる拠り所が必要で、その棒を強く握りしめつつ、回りを回転するだけでもよいから、そこから離れないでいることが必要となってくる、という指摘である。

そして、そのいずれの性質も、人間に本来的に備わっているものであって、人間の中から働き出すものと捉えられていることを押さえておきたい。一つ目の本質についてそのことは自明であるが、二つ目の特質について見ても、変化を望むのが何か外側から力（影響）が働いたからではなく、単調な労役に自ら飽いたためである点を再確認しておきたい。

この詩の言わんとしていることは自然描写ではないと先に書いた、では何がこの詩のテーマかと言えば、人間の本質（特質）とは何か、ということだろう。詩の前半部は、その本質についての考察（観察）が、道を妨げるように倒れた木の視点を通してなされるということだろう。一見して、自然、環境に遮られることにより人間の本質が見えてきたという体裁をとっているものの、実は人間が環境に働きかけることで初

めて自然からの反応が返ってくる、その反応によって人間は自らの本質を振り返ることができる、ということなのである。さらに言えば、人間は自らの本質について反省するために自然に働きかけるのである。先に詩の前半部（ll.1-8.）が現在形で書かれていることに言及し、樞が倒木により進路を妨げられるという出来事が詩人の「仮想」である可能性を指摘した。「仮想」とわざわざ断ったのは、この出来事が人間の本質を探るために詩人により想定された状況なのではないか、と言いたいからである。副題も、直接的には木が倒れたのは進路を妨げられた人間たちの口論を聞こうとしてである、の意だが、木がそんなことを考えて自ら倒れたりするはずのないことは pathetic fallacy という概念を持ち合わせた現代の読者なら先刻承知のことである。木に仮託しているもの実は人間が環境に働きかけ、その結果として自らの本質を反省しようとするというのが実際の目的であったということだろう。

3

1、2節とフロストの詩における人間中心的な自然観を検証してきた。但しそのことは、必ずしも自然（環境）から人間という方向の作用が全くないということの意味しない。その点を、詩 “The Gift Outright” の読みを通して考察したいと考える。

The Gift Outright

The land was ours before we were the land's.
 She was our land more than a hundred years
 Before we were her people. She was ours
 In Massachusetts, in Virginia,
 But we were England's, still colonials, 5
 Possessing what we still were unpossessed by,
 Possessed by what we now no more possessed.
 Something we were withholding made us weak
 Until we found out that it was ourselves
 We were withholding from our land of living, 10
 And forthwith found salvation in surrender.
 Such as we were we gave ourselves outright
 (The deed of gift was many deeds of war)
 To the land vaguely realizing westward,

But still unstoried, artless, unenhanced,
Such as she was, such as she would become.

15

(348)

この詩はケネディ大統領 John Fitzgerald Kennedy (1917-1963) の大統領就任式に際して祝賀スピーチの一環として詩人自身により朗読されたこともありフロストの全詩作品の中でも比較的よく知られたものであり、評価も（そこそこに）高いと言えるだろう。この作品では人間と風土の関係、特にアメリカという国の歴史・文化と風土の関係というやや抽象的な議論が、特徴的なリズムを用いて展開されているため彼の詩の中ではやや難しい部類に入るのかも知れない。但し、フロストの詩作品全体をながめわたした後で振り返るなら、詩の底流をなしている人間と風土の関係についての考えはさほど特異なものではなく、むしろ典型的にフロストらしさがうかがわれるものと言えるのではないかと考える。

そしてこれについては、渡辺利雄氏の「Robert Frost: 'The Gift Outright' の解釈をめぐって」(『英語青年』 Vol. 148, No. 8) が簡潔にして十二分の説明を加えてくれているので、本稿では訳とあわせて引用させてもらうことでその基本的な説明に替えた⁷⁾。

渡辺氏によればこの詩における人間と土地の関係とは、「アメリカ人がアメリカの土地を所有し、それを自分のものだと主張しただけでは、その土地は真の意味でアメリカ人の土地にはならない。そうではなく、アメリカの土地がアメリカ人を所有する、つまり、アメリカ人がその土地に自分自身を捧げ、土地の一部となってこそ、自分自身の土地と言えるのである。」(492) というものである。

1.1. はこの詩の命題。1.2.-1.5. はその命題を実際の歴史に即して具体的な地名を挙げつつ言い直したもの、1.6-1.7. はそれをもう一度所有一被所有という抽象的な言い回しによって捉え直したもの、ということになる。つまり、“Possessing what we still were unpossessed by./ Possessed by what we now no more possessed.” は、まだ植民地であった時代、我々アメリカ人は「(現在では) もはや所有されてはいないものにより所有されながら」= イギリスの王の支配を受けながら、「我々が未だそれによって所有されていないものを所有していた」= その時点ではその土地に自らの全てを捧げていなかったため、真の意味において所有していたとはいえない、それゆえそれによって所有されていたと言うこともできないアメリカ大陸に暮らしていた、という意味になる。

しかし、全身全霊を賭けて向き合うのでなければ土地は応えてくれないし、独自の文化、力強い生活の力は生まれてこない。(< 1.8. “Something we were withholding made us weak” 「何か我々が出し惜しみをしていたものがあって、それゆえに我々は

力強さに欠けることとなった」)

だがとうとう我々は、自分たちが生きているこの土地に対し出し惜しみをしていたものが自分自身であることに気付き、すぐさま自らを放棄する (“surrender”) ことに救いがあることに気づいた。(II.9-11.) (そこで) 取るに足らぬ存在ではあるが、我々は自分自身を「躊躇することなく、全的に」 (“outright”) この土地に捧げたのである。

その土地＝アメリカ (という国) は、その間も次第に西へ西へと国土を広げていたが、それははっきりとした形ではなかった (I.14, “vaguely”)。未だに人間と土地との交流は不足しており、そのため土地も、そこに住む人間も本来持っている可能性を十分に発揮しきれていない (あるいは、真の意味でアメリカらしさを発揮できていないし、また自己認識できてはいなかった)、というのである。それをフロストは “unstoried” “artless” “unenhanced” (I.15.) と形容する。

“unstoried” とは直訳すれば土地が歴史化あるいは物語化されていないということである⁸⁾。“artless” とはその土地 (国、文化) が土地固有の芸術を生み出していないということ。“unenhanced” はそれら2語をより抽象化した形で述べ直したもので、人間とのかかわりの中で土地が単なる物質的な土地であるレベルからより高められた存在へと「(未だに) 高められていない」ことを指しているのであろう。

だからこそ、とこの詩は主張する——今、この時から、自らの全てを贈り物としてこの土地 (アメリカ大陸) に捧げようではないか。それこそが自らの中に (=人間の中に) ある可能性を最大限に生かすことになるのだ、と。I.16. は意味の取り方が難しいが、I.14. の “the land” の同格表現として読むことを提案したい。但し行の前半はこの土地の過去のありように言及し、後半は未来の姿に言及したものとなっている。文脈によって意味を補いながら訳すとすれば、「我々アメリカ人が全面的にコミットする以前から我々の所有を許してくれてきた、そのような土地に」、「これから先我々が惜しみなく働きかけるならば、おそらくは真の意味での所有を認めてくれるであろう、そのような土地に」(我々は自分自身を躊躇することなく捧げたのである)、とでもなるだろうか。

英語と日本語の語順の違いから、日本語に訳すと目的語としての “the land” およびその同格表現である I.16. が先に来て、述部「自分自身を捧げた」が文を締めくくることになるが、英語で読む者にとっては印象はやや異なるものとなることが想像される。名詞句2つにより言い切る形で詩が閉じられている点が大切であろう。目的語としての文法的な位置はそれとして、読者の意識としては、前半は「この土地は我々の働きかけに先回りする形で応えてくれていた」という土地に対するある種の信頼を、後半は「(だから) これから先も我々の働きかけに応えてくれるだろう」という希望 (予測) をそれぞれ表明したものとして、力強い響きを与えながら詩は閉じられる。

この最終行について、いま少し議論のつけ加えをしておきたい。

本節の冒頭でも触れておいた通り、この詩がケネディ大統領の就任式に際してフロスト自身により朗読されたことはかなり有名なエピソードである。その際ケネディの要望により最終行の一部に変更が加えられたというエピソードもまた研究者の間では決して耳新しい情報ではないのだが、このテキストの異同の問題は本稿の目的であるフロストの詩における人間と自然の関係を考える上で些細ではあるが興味深い点を持っていると思われる。

異なるテキストが生じるおおよその経緯は以下の通りである。

この詩の初出は1942年春、雑誌 *Virginia Quarterly Review* においてで、その折の最終行の後半部は“such as she might become.”であった⁹⁾。

その後1943年刊行の詩集 *A Steeple Bush* に、“such as she would become.”の形で収録され、以降全詩集等ではこの形で残されていくことになる。

^{みなび}三度テキストが動くのが1961年1月20日のケネディ大統領の就任式の時で、式に先立つおおよそ1ヶ月前、ケネディからフロストに式における詩の朗読を最終的に打診するための電話がかけられる。ケネディの要請は、式のために新しい詩を書いてもらえないかというものだったという。これに詩人が難色を示すと、では最後の行の後半部を、就任式の日限りでもよいから(“if only for a day”)、“such as she would become.”から“such as she will become.”に変更するという条件付きで“The Gift Outright”を朗読してもらえないかという要請に変わり、これを詩人が了承して就任式に参加することになったのだという¹⁰⁾。

“would”から“will”への変更は「そのような土地になってももらえるのではないか」という願望・希望ではなく、「そのような土地にきつとなる」という、大げさに言えば確約のニュアンスを出したいというケネディの意図によるものと考えられる。そしてそのような意図は、ケネディ自身の就任演説にも継続して流れていて、それがアメリカ国民に、国家にやってもらいたいことを個人が求めるのではなく、個人が国家にどう貢献できるかを考えて貰いたいという新鮮な呼びかけとセットで、新しい時代への希望の保証とも聞き取られることになったのである。

それはケネディの就任演説の最終部分にかなり明白に現れていると思われる。例えば

... With a good conscience our only sure reward, with history the final judge of our deeds, let us go forth to lead the land we love, asking His blessing and His help, but knowing that here on earth God's work must truly be our own.¹¹⁾

(下線部の強調は筆者による)

といった箇所を見る限り、詩“The Gift Outright”とケネディの就任演説の類似性は明かである。フロストもケネディも、アメリカの風景・風土を真の意味で作り出していくのはアメリカ人でしかあり得ない、そしてそのためには個々人の献身的な働きかけが欠かせないと考えていた点で一致していた。但し、そのことは必ずしもケネディがフロストのこの詩を下敷きに就任演説を書いたということではなく、ケネディの価値観とフロストの価値観の間かなりの近親性があったということだろうと思われる。

だがここで注目したいのは、類似点よりもむしろ相違点の方である。フロストは、“might” → “would” → “will” → “would”と変更を加えたが、「1日だけでもよいから」という条件を結局しっかりと守らせている¹²⁾。フロストはケネディとは違い、アメリカの土地の変化が確約されたものでないものとして描くことを強く望んでいたのだと思われる。

ここから言えることは、フロストにとって人間と土地との関係のうち、土地からの応答は、必ずしも確約されたものではないと考えられていたのだろうということである。そして他のフロストの詩作品に照らし合わせて考えるに、土地からの応答が確約されたものでも人間側の働きかけ(努力)は「全的」で出し惜しみのないもの(outright)でなければならない、さらに言えばそのような献身が見返りを期待してのものとならないためにも、応答は確約されない方が望ましいということではなかったか。フロストにおいては、結果を問わず自らを放棄(1.11. “surrender”)した時初めて結果は「ついてくる」、ということであつたろうと思われる¹³⁾。

お わ り に

風景とは、純粹に外界(とりあえず環境と呼んでおく)の物理的なありようのみを言うのではなく、人間が環境をどのように見るか、環境にどのような意味を読み込むか、という文化現象である。

また風景が文化現象であるということは、風景を風景として受け止め、認識するのは人間であることを意味する。逆の方向からこれを言い換えれば、人間がいなければ風景など存在しない(=環境そのものには何の意味もない)ということでもある。

これは非常に人間中心的なものの言い方であり、だから環境は人間が望むままに手を加えて構わないのだという主張に繋がりがかねない危険性を孕んでいる。

しかし風景に関わって我々は幾つか重要な点を見落としてはならない。その一つは、環境に意味を与え、「風景」として認識してゆく時、私たち人間は実は自分自身の本性を意識することになる。大げさな言い方をすると、風景とは風景として意味づけをしている主体のことに他ならない、ということである。今一つは、“The Gift

Outright”に典型的に見られるように、環境に働きかけ、意味を与えていくのは人間であるが、作用の方向はその一方向だけではなく、作り出した（あるいは作り出す途上にある）風景が人間に影響を及ぼすという方向もあるのである。風景とは、そのような相互作用的な、動的なバランスの上に成り立ち、変化していく現象である。悪しき意図をもって作り出された風景はほどなくして悪しき影響を人間に及ぼすことになるだろう、あるいはなおざりにされた風景からはいかなる肯定的な価値も生まれてこないであろう。

なるほど確かにフロストの詩は人間中心的な性格が強いのであるが、そこで主張されているのはただ人間のみを正しいとする独我論的な考え方ではない。むしろフロストの詩から我々が学び取るべきメッセージ（の重要な一つ）は、人間しか環境に意味を与え意識的に風景を形づくっていくものはいないのだから、環境から返ってくる反応に対して責任を取れるのは人間だけであり、またその責任を人間は負わねばならない、ということであろう。

注

- 1) *The Poetry of Robert Frost*, p. 241. 本論でのフロストの詩の引用は、Edward Connery Lathem ed., *The Poetry of Robert Frost: The Collected Poems, Complete and Unabridged* (Henry Holt and Company, 1969) によることとし、以下本書からの引用は括弧内にそのページ数を記して表記する。
- 2) 『ランダムハウス英和大辞典』、“chimney”の項による。
- 3) Frank Lentricchia は、*Robert Frost: Modern Poetics and the Landscapes of Self* (Duke University Press, 1975), pp. 82-84. で、この詩におけるフロストの卓越した技法として自然と時間に関する perspectives の操作を挙げ、自然（特にこの詩の場合、鳥）と人間の記憶の違いに言及している。レントリッキアは注意深く、鳥にも記憶はあるだろうが、人間のそれと異なる点は人間の記憶のみが時間を大きく遡ることができる点にあるとし、「火事により完全に、取り戻し難いまで破壊され、決して戻ってくるのではない過去を思い出す」能力は人間の記憶の呪わしさであると述べる。但し、その後でレントリッキアは、そのような記憶の働きも含め、人間に固有の想像力という力、またその現れである言葉による表現——言い換えれば詩——の肯定こそがこの詩の主張しようとしていることであるという主旨の指摘をつけ加えている。筆者の見方もこれにほぼ近い。
- 4) 詩 “On a Tree Fallen across the Road” は、1921年、雑誌 *Farm and Fireside* に掲載された。
- 5) 脱出速度いわゆる第二宇宙速度という事象である。『世界大百科事典』（平凡社、1988年初版）、「宇宙速度」の項などを参照のこと。
- 6) シュリー、『アドーネイス』“... my spirit's bark is driven,/ Far from the shore . . . , // The massy earth and sphered skyies are riven!/ I am borne darkly, fearfully, afar;” (ll. 488-489, 491-492.) また、キーツ、「ナイチンゲールに寄せるオード」“That I might drink, and leave the world unseen,/ And with thee fade away into the forest dim: / Fade far away, dissolve, and quite forget/ What thou among the leaves hast never known,/ The weariness, the fever, and the fret/ Here, where men sit and hear each other groan; . . . / Away! away! for I will fly to thee, . . .” (ll. 19-24, 31) などを参照されたい。
- 7) 渡辺利雄、「Robert Frost: ‘The Gift Outright’ の解釈をめぐって」（『英語青年』Vol. 148, No. 8, pp. 492-494.）

訳：われわれ自身の全てを捧げて（大意）

この土地はわれわれがこの土地のものとなる前からわれわれのものだった。
この土地はわれわれがこの土地の住人となる前から百年以上われわれの土地だった。
マサチューセッツで、ヴァージニアで、この土地はわれわれのものだった。
しかし、われわれは英国のもの、なお所有を認められていないものを所有し、
もはや所有していないものによって所有された、植民地の住民だった。
われわれは捧げることを拒んでいたあるものゆえに弱い存在となっていた。
そして、生きているこの土地に捧げることを拒んでいたそのものが
われわれ自身であることに気づき、直ちにそれを捧げ、そこに救いを見出した。
西に向かってさまよいつつ自らを実現してゆくこの土地に、なお語られることのない、
芸術をもたない、高められることもないこの土地に、取るに足らない存在のわれわれは
われわれ自身の全てを捧げた。（捧げるというその行為は、多くの場合、戦争の行為でもあった）
こうして、この土地は、過去にそうであったように未来もそうなってゆくであろう。

- 8) *O.E.D.* には “storied” adjective. Celebrated or recorded in history or story とある。
- 9) この詩は、雑誌 *Virginia Quarterly Review* への掲載に先だって、1941年12月5日に William and Mary College において朗読されており、実際にはこれがこの作品における最も古い公開ということになる。（*The Poetry of Robert Frost: The Collected Poems, Complete and Unabridged*, p. 565による）
- 10) Lawrence Thompson and R.H. Winnik, *Robert Frost: The Later Years, 1938-1963*, Holt, Rinehart and Winston, 1976, p. 278. による。
- 11) ケネディの大統領就任演説は <http://voicesofdemocracy.umd.edu/kennedy-inaugural-address-speech-text/> による。
- 12) フロストは就任式の朗読の際に、本来の詩句はこれこれで、今日はこの機会に配慮してこの詩句に変更しているのである、との断りを口頭で入れてさえいる。（“Here he paused, and in slow, accentuated tones, gave his altered version of the last line: “Such as she was, such as she *would* become, *has* become, and I--and for this occasion let me change that to--what she *will* become.” Thompson and Winnik, p. 282. による。）
- 13) 拙文「フロストの詩における想像力の働き方：労働、夢、鏡」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』、vol. 6, pp. 195-214. をも参照されたい。